

SLAVIA CRYSTAL

世界最高級クリスタル洗面ボウルとバスルームアクセサリー



貴方を至高の空間に誘う光の芸術

マリア・テレジアも愛したスロバキアの宝石

www.slaviacrystal.com

SLAVIA
CRYSTAL
Elegant Crystal Works

ワルシャワ国立フィルハーモニー管弦楽団

指揮: アンナ・スウコフスカ-ミゴン

2025年 日本公演



Warsaw Philharmonic

The National Orchestra
of Poland

Anna Sulikowska-Migoń, Conductor
Japan Tour 2025

ご挨拶



phot. D Matloch

親愛なる日本の皆さま

本年はポーランドと日本の長い友好的協力関係の中においてもとりわけ、ポーランド文化の日本における存在感が極めて高まっている年であるといえます。

京都国立近代美術館ではクラクフ国立博物館との共催で今年3月25日より3か月間にわたり、〈若きポーランド——色彩と魂の詩1891-1918〉展を開催、ポーランドが誇る珠玉の芸術作品をご覧頂きました。また、現在開催中の大阪・関西万博においては、ポーランドパビリオンで連日、音楽・舞踊・舞台芸術・文学・伝統工芸などが国の文化を多岐にわたりご紹介しています。間もなく始まる〈ポーランド文化週間〉(9月4～10日)では近現代を中心としたポーランド文化の放つエネルギーを是非ご堪能ください。

さらに今年は5年に一度開催されるショパン・コンクールの年でもあります。前回大会では反田恭平さんと小林愛実さん、2人の日本人が入賞されました。改めておめでとうございます。第19回フリデリク・ショパン国際ピアノコンクールは10月2日にワルシャワで国立フリデリク・ショパン研究所の主催により開幕します。この世界の注目集まる祭典に先立ち、ファイナルで協奏曲を共演するホスト管弦楽団であるワルシャワ国立フィルハーモニーの演奏を日本でお聴き頂けることはまたとない喜びです。ポーランドが生んだ気鋭の女性指揮者アンナ・スウコフスカ＝ミゴンのタクトにもご注目ください。ソリストとして本日ショパンの協奏曲ホ短調を演奏される牛田智大氏は来月、コンクール本選の舞台にも立たれるとのこと。牛田氏を含め日本から出場される13名のピアニストの方々のご活躍を祈念するとともに、ショパンを愛する日本の皆さまにもコンクールの模様をオンライン中継なども活用しつつ是非お楽しみいただきたいと思います。

こうした文化的な強い関心と交流が、今後ますます両国間の理解を深め、より強い絆となって協力関係の発展につながっていくものと確信しています。

本日はどうぞポーランド音楽の夕べをお楽しみください。

ポーランド共和国 文化・国家遺産省
大臣 マルタ・チェンコフスカ

アンナ・スウコフスカ＝ミゴン 指揮 ワルシャワ国立フィルハーモニー管弦楽団

2025年 日本公演

Warsaw Philharmonic Orchestra

Anna Sulowska-Migoń, Conductor

Japan Tour 2025

9.1 日 19:00 東京 サントリーホール

September 1 Mon. 19:00 Tokyo Suntory Hall

ショパン:ピアノ協奏曲第1番 ホ短調 Op.11 [ピアノ:牛田智大]

F. Chopin: Piano Concerto No.1 in E minor, Op.11

[Piano: Tomoharu Ushida]

第1楽章:アレグロ・マエストーゾ

1st Mov.: Allegro maestoso

第2楽章:ロマンス、ラルゲット

2nd Mov.: Romanze. Larghetto

第3楽章:ロンド、ヴィヴァーチェ

3rd Mov.: Rondo. Vivace

ブラームス:交響曲第1番 ハ短調 Op.68

J. Brahms: Symphony No.1 in C minor, Op.68

第1楽章: ウン・ポーコ・ソステヌート — アレグロ

1st Mov.: Un poco sostenuto — Allegro

第2楽章: アンダンテ・ソステヌート

2nd Mov.: Andante sostenuto

第3楽章: ウン・ポーコ・アレグレット・エ・グラツィオーソ

3rd Mov.: Un poco allegretto e grazioso

第4楽章: アダージョ — ビウ・アンダンテ

4th Mov.: Adagio — Più andante

— アレグロ・ノン・トロッポ・マ・コン・ブリオ

— Allegro non troppo ma con brio

[主催] ジャパン・アーツ

[後援] 駐日ポーランド共和国大使館



駐日ポーランド共和国大使館

ポーランド広報文化センター



[助成] ポーランド共和国 文化・国家遺産省



アンナ・スウコフスカ＝ミゴン指揮 ワルシャワ国立フィルハーモニー管弦楽団 2025年日本公演

8月30日(土) 大阪 ザ・シンフォニーホール 主催:ザ・シンフォニーホール ◆

9月1日(月) 東京 サントリーホール 主催:ジャパン・アーツ ◆

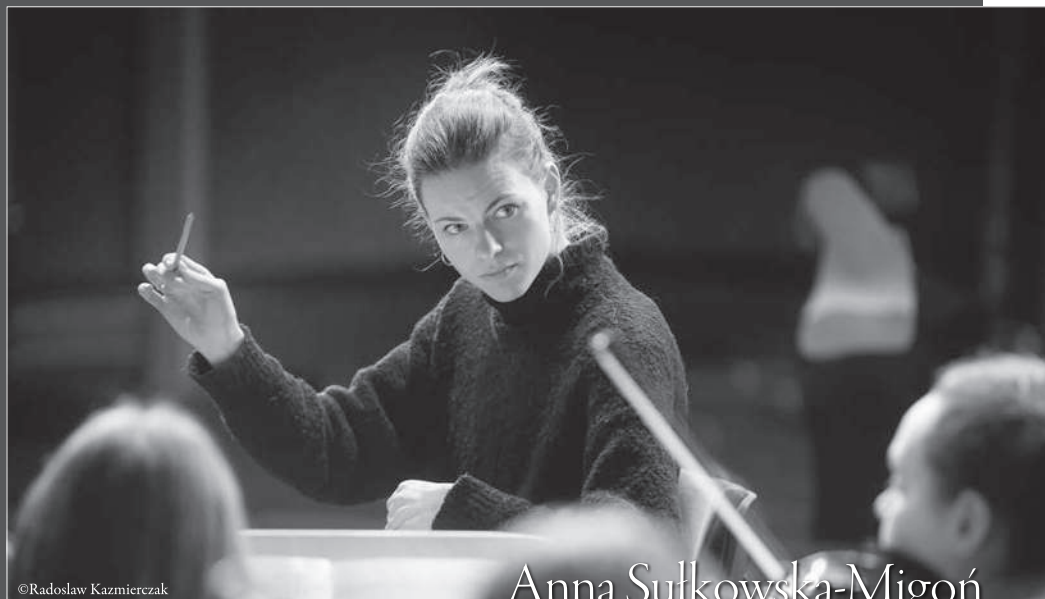
9月2日(火) 愛知 愛知県芸術劇場コンサートホール 主催:中京テレビクリエーション ◆

9月5日(金) 静岡 富士市文化会館 ロゼシアター 大ホール 主催:(公財)富士市文化振興財団 ◆

9月6日(土) 千葉 千葉県文化会館 大ホール 主催:(公財)千葉県文化振興財団 ◆

9月7日(日) 岩手 北上市文化交流センター さくらホールfeat.ツガワ 大ホール 主催:(一財)北上市文化創造 ◆

◆牛田智大



©Radosław Kazmierczak

Anna Sułkowska-Migoń

アンナ・スウコフスカ-ミゴン (指揮)

クラクフ出身のアンナ・スウコフスカ-ミゴンは、2022年3月パリで開催されたラ・マエストラ指揮者コンクール優勝、その後、ワルシャワ国立フィルハーモニー管弦楽団をはじめとするポーランドの主要なオーケストラに定期的に出演しており、今後数シーズンにわたり北米およびヨーロッパでのデビューが待っている。

2024年には、フィラデルフィア管弦楽団の定期演奏会に初登場し、チャイコフスキーの交響曲第5番と、冒頭にはポーランドの作曲家ノヴォヴィエスキのオペラ「バルト海の伝説」序曲を演奏し、聴衆や評論家から絶賛を浴びた。アンナ・スウコフスカ-ミゴンはポーランドの作曲家たちの曲を積極的にとりあげ、広く紹介している。オレゴン・パッサ・フェスティバルでは、ペンデレツキ「クレド」を指揮し、話題となった。

2025年1月にはスイスのベルン市立劇場において、チャイコフスキー「エフゲニー・オネーギン」(新演出)12公演を指揮し、オペラ指揮デビューを華やかに飾った。

その他、ベルリン・ドイツ交響楽団、ポーランド放送交響楽団、パリ室内管弦楽団、ニース・フィルハーモ

ニー管弦楽団、ドレスデン・フィルハーモニー管弦楽団、国立カナダナショナル管弦楽団、ヤナーチェク・フィルハーモニー管弦楽団など、次々とデビューを重ねる。

2022年から2024年にかけての「タキ・アルソップ指揮者賞」の受賞者であり、2022年8月には、シカゴ交響楽団とのタキ・アルソップ・マスタークラスの一環としてラヴィニア音楽祭に参加。2023年にはグスタード指揮アカデミーに参加し、ヤープ・ヴァン・ズヴェーデン、ミルガ・グラジニエーティエラ、ヨハネス・シュレーフリらが審査員を務める中、「ネーメ・ヤルヴィ賞」を受賞した。

ショパン音楽大学にてヴィオラを専攻、その後、ペンデレツキの出身校としても知られているクラクフ音楽アカデミーで指揮と合唱指揮を学んだ。



©Grzegorz Mart

Warsaw Philharmonic Orchestra

ワルシャワ国立フィルハーモニー管弦楽団

ワルシャワ国立フィルハーモニー管弦楽団は、最初の公演を1901年11月5日、新たに建設されたフィルハーモニー・ホールの柿落しとして行った。指揮は楽団の共同創設者にして初代音楽監督兼常任指揮者のエミール・ムイナルスキ、ピアノ独奏はイグナツィ・ヤン・パデレフスキであった。

第一次世界大戦前から第二次世界大戦までの間に、ワルシャワ・フィルはすでにポーランド音楽界の中心的存在、そしてヨーロッパの音楽界においても主要な団体のひとつとなっていた。第二次世界大戦直後、楽団の公演は劇場やスポーツ施設に行われていたが、1955年2月21日、再建された本拠地(ドイツ軍の空襲によって破壊されたホールのかわりに)フィルハーモニー・ホールが開場し、オーケストラは国立管弦楽団の称号を与えられた。新しい監督ヴィルト・ロヴィツキのもと、ポーランドを代表するオーケストラとしての地位を取り戻した。

1955年から58年にはボーダン・ヴォディチコが芸術監督に就任、その後再びロヴィツキが就任し、77年からカジミエシュ・コルト、2002年からアントニ・ヴィットが総監督兼芸術監督に就任した。13年からヤツェ

ク・カスプシク、19年からアンドレイ・ボレイコが就任。24年からクシシュトフ・ウルバンスキが芸術監督を務めている。

今日、ワルシャワ国立フィルハーモニー管弦楽団は、世界的人気と高い評価を確立している。5つの大陸で150以上ものコンサート・ツアーを行い、世界の主要なコンサートホールで演奏している。ショパン国際ピアノ・コンクールや「ワルシャワの秋」現代音楽祭でも定期的に演奏を続けている。ポーランド放送や国営テレビ(TVP)、ポーランド国内外のレコード・レーベル及び映画会社との録音も行っている。

ペンデレツキやシマノフスキの壮大なスケールの声楽曲や器楽曲で2013年グラミー賞(6つのノミネーションを含む)を受賞したほか、ディアパソン・ドール、ICMA(国際クラシック音楽賞)、グラモフォン賞、レコード芸術アカデミー賞、クラシカル・インターネット・アワード、カンヌ・クラシカル・アワード、ポーランド・フォノグラフィック・アカデミーのフレデリック・アワードなど数多くの荣誉ある録音関係の賞を受賞している。



Warsaw Philharmonic Orchestra

Conductor Anna Sułkowska-Migoń

Director Zofia Zembrzuska

First Violin

Krzysztof Bąkowski *
Stanisław Podemski **
Justyna Bogusiewicz
Kornelia Grądzka
Kristine Harutyunyan
Joanna Jakobs
Aleksandra Kupczyk
Agnieszka Lewandowska
Jan Lewtak
Mateusz Marczyk
Grzegorz Osiński
Marek Powideł
Michał Szałach
Krystyna Wilczyńska

Second Violin

Piotr Tadzik ***
Dominika Wojcieszuk ***
Bogdan Śnieżawski ***
Dariusz Dęga
Katarzyna Dul
Izabela Hodor
Bożena Michalska
Paweł Rybkowski
Piotr Sękowski
Magdalena Smoczyńska
Anna Stokowska
Krzysztof Trzcionkowski

Viola

Marzena Hodyr ***
Marek Iwański ***
Agnieszka Duż-Dymus
Grzegorz Groblewski
Alicja Guściora
Katarzyna Henrych
Radosław Jarocki
Tomasz Karwan
Jakub Kowalik
Krzysztof Szczepański

Cello

Aleksandra Ohar-Sprawka ***
Robert Putowski ***
Dominik Drewniak
Maria Leszczyńska-Thieu
Piotr Sapilak
Mateusz Szmyt
Angelica Wais
Jerzy Wołochowicz

Double bass

Janusz Długokęcki ***
Karol Kowal ***
Jakub Kaczmarczyk
Piotr Kochel
Michał Kotowski
Marcin Rybiński

Flute

Krzysztof Malicki ***
Małgorzata Cegielska ***
Joanna Gatniejewska

Oboe

Aleksandra Rojek ***
Piotr Lis ***
Łukasz Dzikowski

Clarinet

Adrian Janda **
Dariusz Elbe
Krystyna Sakowska

Bassoon

Andrzej Budejko ***
Leszek Wachnik ***
Mariusz Oczachowski

Horn

Gabriel Czopka ***
Daniel Otero Carneiro ***

Conductor

Michał Kanawka
Aleksander Szebesczyk
Robert Duda

Trumpet

Krzysztof Bednarczyk ***
Dorota Cholewa
Mariusz Niepiekło

Trombone

Andrzej Sienkiewicz ***
Paweł Cieślak ***
Krzysztof Kott

Tuba

Arkadiusz Więdlak ***

Timpani

Daniel Kamiński ***

Percussion

Paweł Pruszkowski ****

Stage technician

Rafał Iżykiewicz
Sebastian Michałek

Management

Tadeusz Boniecki
Sylwia Strzelecka
Piotr Woźniak

* = Leader

** = Deputy leader

*** = Soloist

**** = Orchestra Personnel Manager

Tomoharu Ushida, *Piano*



© Ariga Terasawa

うしだ ともはる
牛田智大 (ピアノ)

2018年第10回浜松国際ピアノコンクールにて第2位、ワルシャワ市長賞、聴衆賞。2019年第29回出光音楽賞受賞。2025年第51回日本ショパン協会賞受賞。

2012年、クラシックの日本人ピアニストとして最年少12歳でユニバーサル ミュージックよりCDデビュー。これまでにベスト盤を含む計9枚のCDをリリース。2015年「愛の喜び」、2016年「展覧会の絵」、2019年「ショパン：バラード第1番、24の前奏曲」、2022年「ショパン・リサイタル2022」は続けてレコード芸術特選盤に選ばれている。

シュテファン・グラダー指揮ウィーン室内管(2014年)、ミハイル・プレトニョフ指揮ロシア・ナショナル管(2015年／2018年)、小林研一郎指揮ハンガリー国立フィル(2016年)、ヤツェク・カスプシク指揮ワルシャワ国立フィル(2018年)、トマーシュ・ブラウネル指揮プラハ交響楽団(2024年)各日本公演のソリストを務めたほか、全国各地での演奏会で活躍。2025年9月には、アンナ・スウコフスカー・ミゴン指揮ワルシャワ国立フィルハーモニー管弦楽団日本公演のソリストとして6公演に出演。このほか、その音楽性を高く評価され、

これまでにプレトニョフ指揮ロシア・ナショナル管モスクワ公演や、ワルシャワ、ブリュッセルでのリサイタルに招かれるなど活動の幅を広げている。

20歳を記念し2020年8月31日には東京・サントリーホールでリサイタルを行い、大成功を収めた。また2022年3月、デビュー10周年を迎えて開催した記念リサイタルは各地で好評を博すなど、若手ピアニストを代表する一人として絶大な人気を誇っており、2024年に展開した室内楽プロジェクトには多くの注目が集まった。このほか、英国で開催されたリーズ国際ピアノ・コンクールでは聴衆賞を受賞し、世界中の注目を集め、今後更なる活躍が期待されている。

ローム ミュージック ファンデーション 2023・24年度奨学生。江副記念リクルート財団第53回奨学生。

Tomoharu Ushida



ショパン:ピアノ協奏曲第1番 ホ短調 Op.11

“ピアノの詩人”フレデリック・ショパン(1810-49)は、20歳のとき生地ポーランドを離れ、その後パリのサロンを中心に活躍した。それゆえオーケストラ付きの大規模な作品は概ねポーランド時代の所産。2曲のピアノ協奏曲も、祖国を離れる直前に書かれた若き日の作品である。

ワルシャワ音楽院卒業直後の1829年夏にウィーンを訪れて大評判をとったショパンは、国際的な活躍を期して、より万人受けする協奏曲の作曲を思い立つ。1830年初めにまずヘ短調の協奏曲(第2番)を完成。次いで同年8月、本作を完成し、10月11日、再びウィーンへ出発する前の告別演奏会で自ら初演した。なお番号が作曲順と逆なのは出版年の逆転(1836年と33年)によるもの。告別演奏会には初恋の人コンスタンツィアがソプラノで参加していたため、ショパンはひどく緊張していたながらも、演奏自体は大成功を収めたといわれている。そして彼は11月2日、ウィーンへ旅立ったが、直後にポーランドで動乱が勃発。支配国のオーストリアに刃向かったため、ウィーンでは活動困難となって1831年パリへ移住し、2度と祖国の土を踏むことはなかった。つまり本作は、若きショパンの意欲が詰まった“青春の記念碑”であり、故郷からの“旅立ちの音楽”でもある。

曲は、旋律美に溢れた詩情豊かでロマンティックな名品。古典的な協奏曲の形式に沿った3楽章構成だが、オーケストラの比重が低く、ピアノの華やかな名人芸を中心に進行する。

第1楽章:アレグロ・マエストロ。冒頭の堂々とした第1主題と甘美な第2主題を軸に、転調が多用された華麗な音楽が続いていく。曲全体の約半分を占める長大な楽章。

第2楽章:ロマンス、ラルゲット。ショパン自身「美しい月夜のような、懐かしい想い出を呼び覚ます」と記したノクターン風の緩徐楽章。優美な主題を中心に夢見るような音楽が繰り広げられる。

第3楽章:ロンド、ヴィヴァーチェ。「クラコヴィアク」というポーランドの舞曲風に書かれた軽快な主題が繰り返される、澁刺とした終曲。

ブラームス:交響曲第1番 ハ短調 Op.68

ドイツ・ロマン派の大家ヨハネス・ブラームス(1833-97)が、20余年に及ぶ紆余曲折の末、43歳にして世に出した最初の交響曲。ロマン派の同ジャンル屈指の人気作でもある。第1番が異例なほど遅くなった要因は、彼が生来もつ慎重さや自己批判の強さに加えて、ベートーヴェンの後に交響曲を作る必然性を問い続けたことにあった。その1つの解答としてようやく生み出したのが、古典的形式美とロマン的感性が見事に溶け合った本作である。

最初の構想は1855年頃といわれているが、20年もの間書き続けていたわけではなく、まずは断続的に作曲し、1862年に第1楽章の原型を完成後また中断。1874年に本腰を入れ、2年をかけて完成した。そして1876年カールスルーエにて初演され、当時随一の指揮者でピアニストのハンス・フォン・ビューローから「ベートーヴェンの9曲に次ぐ“第10交響曲”」と賞賛された。

この曲は、ベートーヴェンの“苦悩から歓喜へ”の精神を継承しており、ハ短調からハ長調に至る「運命」交響曲と同じ構成がなされている。しかしながら重厚さと歌謡性を併せ持ったブラームスの個性が漲る音楽であり、ずっしりした手応えと濃密な充実感はまさに比類がない。

第1楽章:ウン・ポーコ・ソステヌート — アレグロ。ティンパニの連打が印象的な、重く分厚い序奏で開始。テンポを速めた主部に移ると、劇的な楽想を中心に緊張感を保ちながら進み、激しく高揚していく。

第2楽章:アンダンテ・ソステヌート。歌謡的で寂寥感が漂う長調の緩徐楽章。なだらかな旋律が流れゆき、後半にはヴァイオリン独奏が美しさを醸し出す。

第3楽章:ウン・ポーコ・アレグレット・エ・グラツィオーソ。通常置かれるスケルツォではなく、ブラームスらしい優雅な間奏曲風の楽章。ここも長調で、クラリネットの旋律に始まる柔和な主部に、激しさを加えた中間部が挟まれる。

第4楽章:アダージョ — ピウ・アンダンテ — アレグロ・ノン・トロppo・マ・コン・ブリオ。同楽章のみトロンボーンが参加。序奏はハ短調で重く始まる。ホルンのフレーズで暗雲が晴れてハ長調に変わった後、やや速めの主部へ移り、流麗なメイン主題が登場。複数の素材をまじえながら推進力溢れる展開を続け、壮麗な盛り上がりを見せる。



ARTIST SUPPORT

【アーティストサポート】へ、多くの皆様からお気持ちをお寄せいただきましたことに、心より感謝申し上げます。
寄せられたご支援は、アーティストの様々な活動に幅広く使わせていただいております。

「人のいるところには夢がいる」2026年には創業50周年を迎えるジャパン・アーツの理念です。

どんな時代においても、音楽・芸術から生まれる感動は、人々に夢・希望・生きる力を

与えてくれます。これまでの活動レポートは、ジャパン・アーツのホームページに

掲載しておりますので、どうぞご覧ください。

アーティストサポートの詳細は
こちらをご覧ください。



今年も引き続き変わらぬご支援をどうぞよろしくお願い致します。

◆ ◆ ◆ ◆ ◆ 2025年度ご支援いただいた皆さま ◆ ◆ ◆ ◆ ◆

<年間サポート>

【個人サポーター】

朝妻 幸雄 M.I. 岩村 和央 上村 憲裕 榎本 英二 Y.E. K.O. 大原 志津子 片山 由美子 K.K.
北村 眞 R.K. 新貝 康司 M.T. R.T. 武田 健二 伊達 朱実 田中 治郎 東條 Lilly 苫米地 英人
K.N. E.N. 児子 弥生 S.N. 長谷川 智子 T.H. 樋口 美枝子 M.H. 平山 美由紀 藤野 盾臣
細沼 康子 M.H. 松尾 芳樹 真野 美千代 三木谷 晴子 安田 牧子 山川 和子 (匿名希望11名)

【法人サポーター】

三和プリンティング株式会社 株式会社青林堂
三井住友カード株式会社 ロイヤルリゾート株式会社
株式会社ソーシャルキャピタルマネジメント きづきアセット株式会社
株式会社ロジックアンドエモーション ライフプラン株式会社

<館野泉バースデープロジェクト「みんなで祝おう!卒寿記念コンサート」>

えこ 鈴木 早苗 中村 康江 林 幸仁 平山 美由紀 (匿名希望1名)

<ウィーン少年合唱団 オフタイム・サポート>

石坂 雅美 K.I. K.K. Y.K. 佐久間 隆弥 Rimiko N.S. 竹内 麻里子 中尾 圭吾 T.H.
樋口 美枝子 K.F. 細沼 康子 M.H. M.M. 水足 久美子 水足 秀一郎 ロロコミ (匿名希望11名)

<ウィーン少年合唱団 ツアー・サポート>

江田 明子 T.O. K.K. 佐久間 隆弥 Rimiko 竹内 麻里子 M.T. 平山 美由紀
細沼 康子 M.M. 柳瀬 美佐子 ロロコミ (匿名希望9名)

<千住真理子に「花を贈ろう!」プロジェクト>

石坂 雅美 北村 眞 城戸 健二 桑原 仁志 小森 桂子 佐藤 亨 穴倉 剛 田中 治郎
H.H. 道又 利 村上 晃彦 横田 邦子 (匿名希望7名)

2025年8月17日現在 五十音順、敬称略

お知らせ

現在2025年度年間サポートを受付中です。詳細は、ジャパン・アーツの公式WEBサイトおよび公演チラシ挟み込みの申込用紙等をご覧ください。

株式会社ジャパン・アーツ アーティストサポート係 TEL.03-3499-7720

(平日11:00~17:00 年末年始を除く)